この本、いかがですか？

『アジア遊学』119 アジアの出産
リプロダクションから見る文化と社会

評者・福井トシ子　杏林大学医学部付属病院

アジアの出産から，今の日本に必要なことを学ぶ

小浜正子・松岡悦子，ほか 著
定価 2,100 円(本体 2,000 円＋税 5%)
A 5 判／勉誠出版／2009 年

日本では周産期医療の問題が噴出しており，さまざまな取り組みがなされているものの，なかなか有効に機能していないという現実がある。便利になることや合理的であることの恩恵を受けることで失ってきたものを，今こそ真摯に受け止め，打開策を打っていかなければならない状況にあると言えるのではないだろうか。

この特集は，平成 18～20 年度科学研究費補助金基盤研究 B「東南アジアにおける近代化とリプロダクションの変容」(代表：松岡悦子)の成果発表の一部として企画され，「リプロダクションと家族のオールターナティブデザイン」(代表：松岡悦子)のメンバーをはじめ，関連分野の方々による執筆であると説明されている。連なる著者の名前をみると，助産師はもちろんのこと，文化人類学を専攻する研究者らが執筆している。アジアの出産に焦点をあてたこの特集は，これまで日本人が辿ってきた道とこれから「そのように行くのかもしれない」道について示唆を与えてくれる。

特集は 4 章からなり，第 1 章は「出産の過去，現在，未来」をテーマとしている。第 2 章が「誕生の儀式と産後の養生」，第 3 章が「お産を取り巻くネットワークとその変容」，そして第 4 章では「リプロダクションの最前線―商業化する出産と医療」について取り上げている。1 章から 4 章に，日本を含めた 16 のアジアの国々の出産事情がリアルに描かれている。

巻頭に，この特集によって出産の「共通性と多様性」を考察したいとあるが，読み進めるうちに，時代が変わっても変えてはならないもの，失ってはならないものである出産の場や，出産という状況における周辺の関係性を改めて考える機会になった。「共通性と多様性」は，出産における普遍性を読み取るヒントにもなっている。変化させていくことと，変化させてはならないものの見極めが必要とされる現代にあって，本書に学ぶことは多い。

「アジアの各国には，産後の女性をケアする豊かな文化が息づいていることに気づいた」と，著者の代表らが書いているが，本特集を通読して全く同感であった。日本が失ってきたものが，アジア各国にはまだまだ残っている。今，日本に不足するものは何かを考えるというよりも，何が必要なのかを教えてくれる。これまで私たちの多くは，欧米の出産事情を多くの情報とともに，好むと好まざるとを別にして学んできた過去がある。なぜ，アジアの出産から主体的に学んでこなかったのかと，ふと考えた。

人間に残された最後の自然である出産を，日本が，女性が，そして助産師が，現状をどのように受け止めて，出産の専門職としてどのように行動すべきかを，助産師に考えさせてくれるであろう。助産師ならば，誰もが書棚に置きたい一冊である。

©IGAKU-SHOIN Ltd. 2009

2026/10/15 02:25:46